

模試と同傾向の出題 ～ベネッセ・駿台模試より～

国語

センター試験・第2問 問6

第1回ベネッセ・駿台マーク模試・第2問 問6

問6 この文章の表現や構成に関する説明として適当でないものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

19 20

- ① 本文冒頭の山本くんのエピソードがきっかけとなり、五百羅漢の思い出が語られるという構成になっており、山本くん一家の事情と「私」の身に起きた幼い頃の出来事が重ね合わされることで、奥行きのある文章となっている。
- ② 11行目「妻の視線を背中に感じる。」、13行目「どんな表情をしているかは、背中を向けたままでも」むしろ、そのほうがよくわかる。」は、ふとしたことでずれ違いの生じた夫婦の間の張り詰めた雰囲気を感じさせる表現となっている。
- ③ 52行目「義母」が「私を抱きしめてくれた」日の「翌日から、私は亡くなった母の写真を探そうになった」とあるのは、写真を探す行為が、新しい家族に順応して亡き母を忘れることへの無意識の恐れによるものであることを暗示している。
- ④ 「あじさい」は、65行目では「故人への手向けの花」として、116行目では「これ、おみやげ」と義母への贈り物として描かれ、五百羅漢を訪れたことで生じた「私」の心情の推移を象徴するものとなっている。
- ⑤ 103行目「おとなになっても——いまのほうが、よけいに。」は、羅漢さまなら母に代わって幼い「私」にうなずいてみせるような奇跡も起きると思えるほど、羅漢さまを信じるようになった「私」の心情の変化を端的に表している。
- ⑥ 111行目「その声が、まるで子守唄のように、耳からすうっと胸の奥に染みていった」は、母に出会えた喜びとこれからも母に見守られているという安堵で、亡き母に焦がれる気持ちがなだめられていくさまを比喩を用いて描いている。

問6 この文章の表現に関する説明として適当でないものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

19 20

- ① 1行目から69行目は12行目の俊介の言葉を除いて「」がないが、71行目から92行目は郁子と石井の会話に「」が使われ、93行目以降また使われなくなる。「」のない部分は郁子の思考の流れに沿って文章が展開している。
- ② 22行目「馬に乗ってきて、そのままずっとわたしのそばにいればいい。」は、郁子の心情が「郁子は」と思ったなどの語句を用いずに「わたし」という一人称で直接述べられている。これは郁子のその場での率直な思いであることを印象づける表現である。
- ③ 56行目、87行目、97行目では郁子の心情が（ ）の中に記されている。ここでは、（ ）の中に入れることによって、その内容が他人に隠したい郁子の本音であることが示されている。
- ④ 57行目「食事をしてはいる俊介、海の俊介、山の俊介、草を抱く俊介、寺院の前の俊介、草原の俊介、温泉旅館の浴衣を着た俊介」の一文には一枚一枚の写真の中の俊介の様子が「俊介」の反復によって羅列されている。これによって、夫のさまざまな姿に郁子が気づいたということが表現されている。
- ⑤ 「名所旧跡」という語は、本来、有名な場所や歴史的な事件にゆかりのある場所を表すが、86行目の「名所旧跡」は、俊介という個人に関わりのある場所として用いられている。この傍点は、石井が、あえて本来の意味を離れ、冗談めかしてこの語を使ったことを示している。
- ⑥ 93行目「一度も来訪することはない」の「なかった」の「だ」は、105行目「その時代の俊介に会ってみたい、と思っただった」の「も」の「だ」は、回想において改めて思い至ったことを確認する文末表現である。前者には郁子の悔やんでいる気持ちがあらわれており、後者には懐かしむ気持ちがあらわれている。

今回のセンター試験の第2問小説・問6では、文章の表現を問う出題があった。「適当でないもの」を2つ選ぶ形式は、本試験では過去2年続けて出題されている。特色ある表現が登場人物の心情や場面・情景の描き方にどのような効果をもたらしているかについて、丁寧な読解が求められた。

第1回ベネッセ・駿台マーク模試の第2問小説・問6でも、文章の表現や構成を問う設問を出題している。今回のセンター試験同様、現代作家の文章で読みやすい内容だが、問題文の構成、比喩表現の意味や効果をとらえられるかどうかを試しており、センター試験で求められた力と類似している。

いずれの設問も、文中の表現や効果を、文脈や展開を踏まえて理解する力が求められる出題であった。